

## 食育実践に向けた近畿地域の連携シンポジウム

### 【基調講演】学校、家庭、地域が連携した食育活動

武庫川女子大学文学部教育学科 専任講師 藤本 勇二 氏

- ・私は26年間、徳島で小学校の教員をやって、今、大学では、小学校の教員になる学生さんを応援している。今からお話しするのは小学校の教室で、子どもたちとどんなことが起こったかということ。
  - ・その年は「野菜の修業始めます」という学習を1年間やっていて、野菜を1日300から400グラムぐらい食べようという学習を計画した。キャベツを千切りにする。どーんと出したら、こんなにたくさん食べられない、子どもたちの目の前でゆでて、そして量が減ったら、これだったら食べられるよねという学習を組んでいた。
  - ・先生、野菜をとるかわりに野菜ジュースを飲んだらいいよ、という児童の発言。野菜ジュースを飲んだらいいよと言われたときに、子どもにどう返していいのかを十分まだ勉強していなかったものだから、それもいい方法かもわからないねと言って、書きとめておいた。
  - ・授業が終わった後、参観日だったので、お母さん方と話をした。先生、すごいね、子どもってあんなこと言うんやねと。そうでしょう、子どもって本質突くんですよと。そしたら、あるお母さんが、野菜ジュースを飲むよりも野菜を食べるほうが旬ということでもいいんじゃないですかと。そしたら、あるお母さんが、先生、食物繊維の話もあるんじゃないのと言って、参観日に保護者と授業研究会ができた。
  - ・ちょっとここで（会場に）伺いたい。野菜をとるかわりに野菜ジュースを飲んだらいいよって言ったときに、皆さんだったらどうお答えになるか。
- 来場者：ジュースというのはのどごしはいいですけど、かみ砕くという、野菜独特の甘みとかそれが実体験できませんよね。
- 来場者：体験とかいうこともあります、ゆでたら小さくなるとか、そういうことがジュースでは伝わらない。
- 来場者：野菜ジュースというのは、すごい手軽。手軽というのものもあるんですけども、野菜本来の味、旬、そういったものを感じられなくなっているんじゃないかな。
- 来場者：野菜ジュースのメリットとデメリット。食物繊維も不足していますし、加熱処理しておりますので、水溶性のものはやっぱり少なくなってしまうたり。一方で、カロテノイドだったりポリフェノールだったり、そういったものはジュースにすることで、生のものを食べるよりも消化吸収がよくなります。
- ・私が今日お伝えしたいメッセージ、今、発言してくださった方の言葉、皆さん色合いが違うでしょう。やはり、自分の立ち位置をすごく大事にされている。それが大事。

- ・私は、子どもたちの近くにいる大人のご意見を聞こうと考えた。もちろん全国の栄養教諭の知り合い、または家庭科の先生、大学の先生やメーカーの方、食育の研究者にもメールを出して、そういう点ではネットワークはとても大事。どう思われますかのご意見を聞いて、私の中の肥やしにしてきた。私が、授業として決め出したのは、子どもの近くにいる大人のご意見。
- ・子どもたちの食にかかわる大人ということで、歯医者さん、栄養教諭、養護の先生、JAの方に聞いた。
- ・野菜の栄養のビタミンCは時間がたつと壊れやすいんですよと言ってくださった栄養教諭。食物繊維をとると、すっきりうんちが出ます、これを言ってくださったのは、養護の先生。子どもの問いに本気で答えてくれる大人の存在に感激した。繊維質のものを食べると虫歯の予防になると、歯医者さん。みんな多様なメッセージを送ってくださっている。しかも、大事なことは、自分の立ち位置から見た答え。これが一番子どもには説得力がある。JAの方は何て言ったかという、やっぱり市場の町の野菜をしっかりと食べてほしいなと言ってくださった。つまり、4人が4人とも見ているものが違う。でも、求めているものは同じなのではないか。
- ・食育を、否定的な面、肯定的な面を全部捨象してしまって、一方的な価値観を語り、一面的に伝えてしまうと、子どもたちは全然考えなくなる。食育というのは、食べることとそれを育てること、つまり生産から流通、消費、廃棄まで、食べ物が来し方から行く末までをつなぐことなのではないか。
- ・人と人をつなぐ。子どもが発した問いで、大人が考えることで、みんながつながっていく。それぞれの立場を考えて、子どものことを考えてつながっていきましょうよと。そのためには、我々は、つなぎ手である自覚とその覚悟が必要ではないかなと思う。
- ・10歳の子どもも本質を見ている。体ではわかっているんですけど、言葉を伴っていないだけのことはいっぱいある。そういう存在だと子どもを見れるかどうか。
- ・子どもが求めているのは答えなのでしょうか。いや、むしろ後ろのほうの答え。つまり、大人がどう考えるの、このことについて大人はどう答えてくれるのということを求めているのではないか。暮らしの問題って、唯一絶対の答えってあるのでしょうか。そのことを問い続けていくことが学習であると思っている。
- ・地域で子どもを育てるつなぎ手としての自覚を持っている人を、私はプロの大人と呼んでいる。年がたけている大人という意味ではなくて、そのことにこだわりを持って、自分の立ち位置を自覚している大人、その大人と授業をやってきた事例を紹介したい。
- ・教室にある日、指令書が張り出された。指令書には、次のように書いている。野菜の苗を学校に持ってきてね。ただし、条件があります。一つ、市場の町でつくっている野菜。一つ、買ってきてはいけない。一つ、余っている野菜。なぞのパティシエより。

- ・ 4年生ぐらいですから、物語に入ってくれる。大人の問いに子どもが素直に答えるわけではない。子どもは子ども同士で学び合いながら、次の一步を踏み出す。花を植えていた花壇が野菜畑にどんどん変わっていく。
- ・ 私は何をやりたかったかというと、実はプロの大人として、野菜のスイーツをつくっている柿沢安耶さんと一緒に授業をしたかった。鳥取の食育のセミナーでパネルディスカッションをした。この方は、畑、田んぼが好き。おもしろいなと思った。
- ・ 柿沢さんを招いてスイーツをつくった。柿沢さんも、つくりなれたものがあると。6月に市場の町でとれる食材という条件をつけた。ナスのコンポートタルト。私はそれまでコンポートタルトというのが何かわからなかった。この程度でも学習を始められる。頼れる人がいれば。聞ける人がいれば。協力してくれる人がいれば。
- ・ 子どもたちは、このナスのコンポートタルトをぺろりと食べてしまった。子どもたちは、もう一度、柿沢安耶さんに会いたいと言います。こんなおいしいものが食べられて、楽しい時間を過ごしたんだから。
- ・ みんなが市場の町の野菜のことをもっといっぱい知ったら、安耶さん来てくれるかもしれないと言ったら、先生、野菜の修業をしようと言った。子どもたちがだれに弟子入りしようかということで、師匠を自分で探してくる。
- ・ 私は柿沢さんと契約は結んでいた。1回はイベントですから、1回では学習になりません。2回来てください。と。
- ・ 子どもたちの修業が始まる。女の子が取材している。放課後にことしの野菜はどうですか聞いています。ことしは水が少なくて虫が発生して大変なんよというのを帰りの会で言うと、別の子がスイカの農家の方も言っていたよってという話で盛り上がる。
- ・ 栄養教諭から、野菜をスイーツにするんだったら、どんな野菜がいいだろうな、市場の町で、11月ぐらいが収穫になるような野菜で、野菜そのものが味がかなりついている、そんな条件で絞り込んだら、ブロッコリー、ホウレンソウ、キャベツ、この3つがいいんじゃないかなという授業をしてくれている。
- ・ 7月ぐらいの個人懇談で保護者の方に言われた。うちの息子、実家に行って泊まり込んで、じいちゃんの野菜の収穫を手伝うと。うちの娘、芽キャベツを買って、今、育てていると。つまり、修業している。これまでの農業体験というと、圃場を借りて、一斉にみんなやって、本当に個人個人で学び落ちているんだろうかなという部分がある。これは完全に個人個人で農業体験をしていると私は思うが、皆さん、どうでしょうか。
- ・ うちの子どもたちは本当に野菜嫌い。残飯なんかめちゃくちゃ多くて、食が細い。それこそ食の問題を抱えている。市場の町は徳島県でも代表的な農業の産地で、徳島県は野菜をたくさんつくっているが、そのビニールハウスや登下校で遊んでいるところなのに、畑や田んぼのことが子どもたちの話や日記の中に出てこない。これは問題だなと思って授業を始めた。

- ・子どもたちが考えたレシピを30ぐらいに絞って、修業した様子を手紙に書いたりして、それを柿沢さんに送った。柿沢さんは目の前で、みんなが送ってくれたレシピの中で6つ選ぶことにしましたと言って発表してくれた。
- ・ここで、私は連携することのすごさを学んだ。小学校の教員だったらわかるが、小学校4年生が調理実習で6種類の料理をつくることはあり得ない。子どもたちが考えたレシピが現実のものになる。つまり、夢が現場に即して現実のものになる瞬間に立ち会いたかったと柿沢さんは言った。だから、6種類なのかと。これは学校の教員の感覚とはまた違うから連携するといいなということ。
- ・私はポタジエのケーキが並んでいるケースの写真を見せて、先生、みんながつくったケーキはポタジエで売れますかと聞いた。そしたら、もっと見た目だとかトッピングだとかまだまだ改善するところはいっぱいあるから、とても売り物にはならないよと言ってくれた。
- ・みんなだったら6つは大変、でも、1つだったらできるかなというふうに、またほのかな期待のメッセージをくれたものだから、子どもたち、また頑張る。ポタジエで売れるようなケーキにしよう。どれだったら自分たちで全部最初から最後までできる。つまり、学校の調理器具だけでできて、大人の手を借りずにできるという、安全だとか技能のことも含めて検討を始める。
- ・学校できるものという、ハウレンソウの蒸しパンということに気がつく。つまり、学校の調理器具で賄える、油で揚げるのはとてもできない。でも、その中で、子どもたちはだれかに食べさせたいという気持ちが出ている。だから、お年寄りやおばあちゃんに食べさせるのは余り甘いものはよくないな、みたいな話も出始めている。
- ・保護者の方にも、参観日で作って食べてみて、お味はどうと試してる。これって家庭科の学び。子どもが自分ごとになって、総合的な学習の時間で、追求していったことは家庭科の学び、つまり教科の学びを達成することができる。
- ・食や農の学習というのは、学力はちゃんとつく。興味がわいて、そのことを自分で解決したときの達成感を味わえば、それは子どもというのは、教科だろうが総合だろうが道徳だろうが特活だろうが、そんなのは分けていない。暮らしということ、自分がちゃんと生きるということだったら、教科の学びをちゃんとする。
- ・都合4回目のスイーツづくり。ハウレンソウの蒸しパン。お世話になった大人の人に食べてもらおうと。10歳ですから二分の一成人式というのをやる。その集会で食べてもらおうという、だれかのためにつくることが子どもたちの中にも入ってきていた。
- ・ここで、柿沢さんが（写真に）写っているのが不思議。契約は2回。電話がかかってきた、藤本先生、その後どうなりましたかと。関西で仕事があるから、ついでに行きますねと、全く自腹で来てくださった。つまり、この子どもたちの物語の中で、もう柿沢さんも自分ごとになった。

- ・子どもと柿沢さんの関係が変わる。1回目、柿沢さんが来たときに、驚いたり喜んだりふわふわしていたのは大人。我々は柿沢さんすごいなと言っているが、子どもは何かすてきなお姉さんとしか思っていない。ところが、一度、ナスのコンポートタルトをつくった後は、柿沢さんの情報が入ってくる。テレビに出ていた、雑誌に出ていた、子どもはどんどん情報は集まってくる。そうすると、2回目は柿沢さんの前にサイン帳の列。ところが、3回目になると、また普通のお姉さんに戻る。
- ・子どもたちと1年間学ぶと、こんな学びが生まれた。野菜の好き嫌いが少なくなった。残飯がなくなった。給食の野菜を残すことが減った。市場の町には野菜をつくって頑張っている人がたくさんいることがわかった。あきらめないで頑張ることができた。たくさんの人に応援してもらってできたことで、感謝の気持ちが生まれた。食べる人のことを考える大切さを知りましたと。
- ・私が柿沢さんと呼んだ理由はまだある。小学生の女の子のなりたい職業ナンバーワンはパティシエ。柿沢さんと会ってから2回目は、クラスの3分の1の女の子がパティシエになりたい、男の子もパティシエになりたい。ところが、授業が終わったら、パティシエになりたいという子は1人か2人になった。つまり、みんなパティシエは嫌だじゃなくて、大変だって気がついた。つまり、その動き、姿勢、顔、視線、見ているものすべてを通して10歳なりにキャリア教育みたいなことをやったんじゃないかなと私は思う。
- ・これは決してパティシエを否定しているのではなく、10歳でパティシエ、仕事に出会って、あとまた何年か後にもう一度仕事に出会ったとき、また誠実に向かい合う体験をしたのではないか。それぐらい食とか農という教材は深いと私は思う。
- ・友人に、野菜をスイーツにして食べるなんて邪道だろうと言われた。確かに私も邪道だと思ふようなところもあった。野菜は野菜そのものを食べるのがやっぱりいいんでしょうと思っていたが、授業が終わった後、ふと気がついた。この子たちは1年生、2年生、3年生から学級活動の時間を中心に、野菜の栄養という授業は受けている。野菜を食べましょう、栄養はこうですよ、体がこうですから、と言われているのに生活は変わらなかった。邪道と言おうが何と言おうが、直球でなくても変化球を投げた瞬間、子供たちは生活が変わったと私は思う。スイーツにしたら食べるようになってしまったんだったら、邪道であろうが何であろうが、子どもの暮らしが変わるんだったら、それでいいんじゃないかなと私は自分で自分を納得させている
- ・ともすれば、食育だとか食農教育というのは、余りにも現場にいる人が熱い思いで語るものだから、お米は農家の方がとか、命の恵みをとか、命だとか生態系だとか強く熱く語るものだから、子どもとの距離が離れている。子どもの関心はそこじゃない。楽しく、おいしく、すてきな時間を過ごせたら、そんな大人に出会いたい。その向こうに暮らしや環境や人のつながりや命の豊かさと子どもたちは出会っていく。余りにも思いを持っている人たちが子どもに接するものだから、真正直にストレートの命をぶつけるものだから、子どもたちはかわってしまう。だって、命なんか子どもに背負えるはずがない。

結果として気づくということじゃないか。私は子どもたちの姿からそれを学ばせてもらった。

- ・ 皆さん、学級担任だとか小学校の先生が、温度差があって投げるボールを打ってくれないという思いがあると思うが、学級担任はすごく現実的。うちの4年生ができるか。お金や安全は、どこでやるのと、妥協するから、どんどん目線が下がっていく。
- ・ 自分がやろうということを出すとすることは大事。食はみんなの関心事で、毎日だれかは何かを食べているから、絶対、応援団は生まれる。
- ・ 子どもはきっと我々を見ているのではないか。我々は見られている。つまり、子どもの問題じゃなくて、我々の姿勢の問題。つまり、子どもたちの視線の先にある我々が問われているのではないのでしょうか。
- ・ 食育と言われたときに、我々は地域で子どもたちを育てるということが大事だとは思いますが、その手前として、我々の思いや願いや我々の立ち位置、私はこう思いますけど、どうでしょうか、皆さんで話し合っ、よりよい答えをみんなで探していきませんかという、そういった思想が問われているように思う。食育がそういった機会になって、皆さんがすてきな子育てができる、そういった大きなきっかけになると私は信じて、子どもたちと一緒に、そして、今は学生と一緒に授業づくりをやっている。

○来場者：食育に入る前に、食べ物を残すことは子どもの権利であるとか、もしくはアメリカのように自由にカフェテリア形式のような感じで食べるものを選べるようにすべき、家庭教育の中でそういうふうな状態。学校給食は火を通して野菜なので、食感が違うから野菜もはなから食べたくないとか、そういう意見が多々あって、家庭の教育というのが今の子どもの肥満とか偏食とかそういうものに悪影響を与えているというデータが出てきている。

- ・ 食育に入る前にとという言葉がちょっと気にはなるが、私は別に食育をしようと思っっているわけではなくて、そういった人たちとつながっていく仕事をしたい。そういった方は多分孤立していることないか。そういったご家庭の多くはやはり孤立している。つながっていない。だけど、そのことで例えば、食育はねとか健康はね、食習慣の改善は学力につながると言っ、情報だとか知識だとかそういったことで説得しても、私の経験から言っても全く動かない。一番キーはやっぱり子どもだと思っ。子どもが喜んで楽しんで、子どもが、ああ、食べられたよとなったら、親も少しずつ変わっていくと思っっている。食というのは地域性がありますから、確かにそれは大きな問題だと思っんですよね。でも、あきらめていないんでしょ。いや、あなたなんですよ。それが大事なんです。あきらめるかどうか、つまり私が言ったいのは、そういった覚悟と自覚を持ったら、やっぱり続けていくということ、これが私にとっては大事だと思っばね。